

## 【考察】

投資金額も少なく、かつ汎用されているスマホを使用し、光学機器の命とも言える対物レンズの状態を確認出来た事は、光学機器の点検・管理としては有意義であると考えられた。“高額な光学機器を工学技士が管理する”を目指し、更なる努力をしたいと考えている。

## 6. 下部内視鏡検査時の下肢保持具の作製

九州大学病院 光学医療診療部

○中村あすか 小柳 亜衣 大保つかさ 清藤 美子  
山本 直子 藤岡 審 清水 周次

### 【はじめに】

A病院では年間約14,000件の内視鏡検査を実施しており、そのうち下部内視鏡検査は約4,500件で、半数以上が鎮静下で検査を行っている。下部内視鏡検査では、スコープ挿入を容易にするために患者の体位変換が必要である。仰臥位では下肢を膝立の状態や、膝を組ませた状態にすることが一般的であるが、鎮静下の検査では下肢の脱力により膝立が保持できず、スコープ操作に支障を来すなど検査中断の要因となっていた。そのため、看護師が下肢保持の介助を行っているが、介助中は患者から離れられず、生検や腹部圧迫などの検査介助ができず問題であった。そこで、介助者による下肢保持を必要とせず、検査が行えるような下肢保持具（以下、保持具）を独自で試作し、最終的にはメーカーと共同し、作製したいと考えた。

### 【研究目的】

下部内視鏡検査における保持具の有用性を検討する。

### 【研究方法】

調査期間：平成29年12月1日～平成30年1月15日

方 法：1. バスタオルを用いたL字型の保持具を試作

- 1) Aは幅44×奥行15×高さ13cmで一辺が15cmの正三角形とし、裏面には滑り止めを装着した。Bは幅62×奥行7×高さ20cmの長方形とした。(図1、2)
- 2) Aは足底を支え、膝を屈曲位とする。Bは下肢を寄りかけることで、膝立を保持する。(図3)

2. 鎮静下に下部内視鏡検査を受ける患者50名に保持具を使用

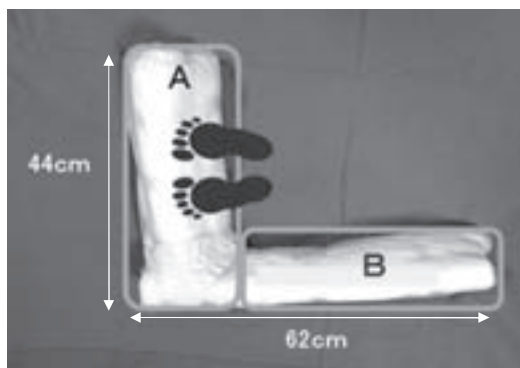


図1 上方から見た保持具

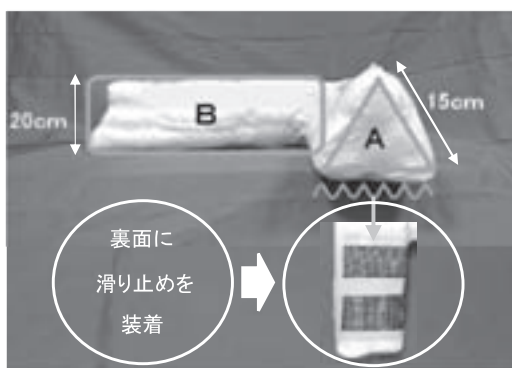


図2 側面と裏面から見た保持具

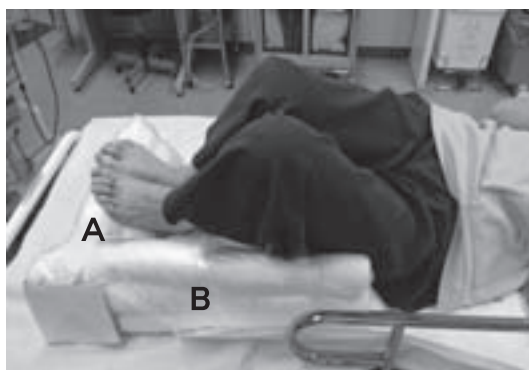


図3 保持具を使用している様子

3. 保持具の設置は看護師が行い、設置した看護師と検査を実施した医師に聞き取り調査を実施

倫理的配慮：聞き取り調査の回答は個人が特定できないように配慮し、調査結果は研究以外の目的で使用せず、終了後はデータを破棄した。

### 【結果】

保持具を使用した患者50名は、年齢:28～80歳、体重:37.6～75.8kg、男女比:1:1であった。保持具の設置は内視鏡室での実務経験が3ヶ月～4年の看護師が行ったが、全員が問題なく設置することができた。看護師の聞き取り調査の結果、保持具設置時に「鎮静下の患者の膝立が保持できた」と答えた割合は100%で、そのうち90%は、検査終了まで看護師が下肢を支えるなどの介助を必要とせず、残りの10%は保持具の再設置を要した。医師の満足度を調査した結果「満足」「まあまあ満足」が合わせて90%を占めていた。また保持具の導入について医師全員が「今後も継続して使用を希望する」と回答した。

### 【考察】

今回の研究は下肢の伸展を防ぐことを第一の目的とし、足底を支える枕を作製したが、

下肢が脱力により横に倒れ、検査台の柵に接触することが多かったため、下肢全体を寄りかけることができるL字型とした。

看護師の聞き取り調査では、保持具は鎮静下の患者の膝の屈曲を保ち、屈曲により立ちあがった膝を左側に倒す形で保持できることが分かった。また、仰臥位において下肢を膝立の状態や、膝を組ませた状態に比べ、保持具の使用は下肢全体を支えることで安定した体位保持となり、苦痛の軽減に繋がったと考える。

保持具の使用により、看護師は下肢保持の介助が不要となり、生検や腹部圧迫などの検査介助がスムーズにできるようになった。また、医師は検査が中断されず、手技に集中でき、保持具は円滑な検査を実施するために有用であると考えた。

### 【結語】

下部内視鏡検査時の保持具を考案、試作した。保持具を使用し、鎮静下の患者の下肢を保持することができ、保持具は鎮静下の下部内視鏡検査の実施に有用であると考えられた。現在、メーカーと共同で、高反発素材を使用した保持具を作製中である。(図4)

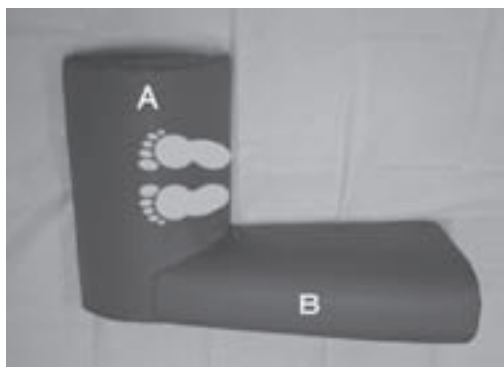


図4 メーカー作製の保持具

【連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

TEL：092-642-5766

九州大学病院 光学医療診療部】